真宗と土着化

松野純孝

一　キリスト教における福音の土着化

日本キリスト教界――とくにプロテスタント系――では、日本における宣教百年記念を契機として、「福音の土着化」ということが大きな問題となり、種々の論議をよびおこした。この土着化論のきっかけとなったのは、日本基督教団の招きで三十五年十月に来日した、宗教学、布教学の権威ヘンドリック・クレーマー博士の日本の教会に対する痛烈な批判にあったといわれている。博士は、日本の教会は、その建物や礼拝様式に見られるように西欧的であり、日本の現実から遊離していることを警告した。

しかし、教会の土着化問題は、博士の忠告をまつまでもなく、次のような目前の事情のあったことは否めない。キリスト教が天文十八年（一五四九）日本に伝来してから四〇〇年、宣教が許されてから一〇〇年も経ているのに、まだ約八〇万人という信徒（固いところ、五〇万人程度といわれる）しかできていない。これはわが国人口の一％にも満たぬことを示している。

これに対して、新興宗教には今日、国民二〇人に一人の割で入っているといわれる。それは、この戦後の僅々二〇年足らずの間の出来事といっていい。創価学会、立正佼成会、霊友会教団、生長の家、PL教団、世界救世教、念法真教など多数の新興宗教が簇生した。なかでも、現在五五〇万世帯と公称する創価学会の実数は正確には分からないが、参議院議員選挙における同学会推せん候補の得票数をみると、だいだいその教勢がうかがわれよう。

創価学会参院選の得票状況

時期	当選者 地方区	当選者 全国区	当選者 計	全国区得票合計	比率	学会の公称世帯
昭三一・七	一	二	三	九九一、五五二	三・五%	三〇〜五〇万
昭三四・六	一	五	六	二、四八七、七九五	八・五%	一二七万
昭三七・七	二	七	九	四、一二四、二四四	一一・五%	二七〇万

すなわち、昭和三十七年七月の参院選は全員当選し、得票数は社会党八六六万（十九人）の半分、共産、民社党をはるかに引きはなした。（高瀬広居「第三文明の宗教」二七五ページ）この全国区得票数は、投票した国民の九人に一人が学会の候補者を支持したことになる。このように投票した国民の九人に一人の割で支持されているのである。

このような新興宗教の抬頭に対し、宣教開始以来、その五倍もの歴史をもつキリスト教が、まだ国民一〇〇人に対して一人にも満たぬといった状況――もっとも二十歳以上の成人人口は約五、一〇〇万であるから、そうした成人人口からすると、一〇〇人に一人の割――であり、そこにあらためて教会の土着化について反省が加えられることは、また当然でもあったわけである。しかも、戦後日本の状況は、クリスチャン将軍によって

統治されたキリスト教ブーム時代で、いわば順風満帆といったものであった。しかるに、その教勢の進捗ははかばかしくなかった。こうして、キリスト教をいかにして日本に土着化するかが、大きな関心となったわけである。

そこで、ある牧師は、キリスト教が日本に受容されるためには、先ず日本人の心性を明らかにする必要があるとし、その心性として、①情緒性、②重層性、③シャーマニズムの三つを指摘し、これに対応して福音の土着化につき、次のようなきわめて具体的な五つの提案をしている。すなわち、1日本的神学の樹立、2牧師の聖（ひじり）化、3集会所から聖堂へ――日本人の情緒性上、荘厳な寺院が効用をもっているので、耳が聞えない老人でも礼拝しうるような聖堂の建設――、4日本人用カテキズムの作成――冠婚葬祭など日常生活における明確な指針をもった信仰問答が作られ、家庭と教会において用いられなければならない――、5信仰の祭儀化――外来宗教としての仏教も実際は祭儀となってはじめて、日本の仏教となり、民族の伝統となった――の五項目である。

ある牧師は、日本では共同体的意識が強いので、そうしたところへキリスト教といった新しい宗教は入り難い。そこでそうした共同体的意識のくずれているところや薄いところから入ってゆかねばならぬ。農村などでは、農民の要求している農業技術を教える。病院とか農業学校、保育託児所などの福祉施設を作り、この施設と農民とのつながりを通して伝道をすすめる。また逆に共同体を握っている要人を先ずとらえて洗礼を受けさせるようにすれば、その要人をとおしてキリスト教化がスムーズに展開してゆくのではないか。こういった土着化の考え方である。

また、土着化を習俗化と解し、教会主催の盆踊りや教会幼稚園での七五三祝い、教会の墓地経営などを行なったところもある。そうかと思うと、こうした習俗化、日本化にどこまでも反撥して、キリスト教の独自性、

他者性を一層純粋に押し進めようとするものもある。

こうして、土着化 indigenization（この言葉はラテン語の in-gignere〔内に生れる〕から来たものとされる）について、だいたい次の三つの動きに分けられている。第一に、土着化を習俗化、日本化とする即物的立場。第二に、これとは全く逆に、キリスト教の独自性、他者性を純粋に推進し、いわゆる土着化を考えない立場。第三に、上記の第一、第二の立場の間にたって、キリスト教の独自性を保ちながら、しかも日本の精神的風土との間に対話の場を見出そうとする立場。ここでは、土着化とは結局、人間としての事情の了解とし、キリスト教信仰にとって、生命的なもの（究極的なもの）と、歴史的付加物（非究極的なもの）とを区別し、信仰の非究極的なものの否定的機能を強調する。つまり、土着化とは「把握すること」と、「突き破ること」との間の緊張の上に成立するとするのである。

もちろん、この土着問題をめぐって、これまで土着化を妨げてきたキリスト教界の自己反省がいろいろと行なわれていることはいうまでもない。たとえば、教会について、その自己目的化と閉鎖性、連帯性の欠如と孤立化、インテリ中産階級的性格、牧師のエリート意識、などが反省され、「仕える教会」が強調されている。

このようなキリスト教の土着化をめぐって、日本基督教団信仰職制委員会では、三十七年十二月に「福音の土着」（全文一〇八ページ）を公刊した。

ところで、このような福音の土着化は、単にキリスト教界における問題にとどまらず、既成の仏教界においても正に焦眉の問題といえる。

そこで、今日今後の仏教界のあり方を考えるに当たって、まず日本的私の地盤に立って打ちたてられた親鸞の宗教がどのようにして、民衆の需要にこたえ、民衆の宗教となっていったか、を考えることが大切かと思われる。それは土着化の問題でもあるからである。ここでは問題を一般化するため、いわゆる宗教論義に深入り

することを避けて――結局この深入りが最も重要な核心なのであるが――、きわめて日常的な問題にしぼって考えてみることにしたい。

二、親鸞における両親と国家との否定

「教行信証」化巻に、

外論に曰く。老君範と作す、唯孝唯忠、世を救ひ人を度す、慈を極め愛を極む、是を以て声教永く伝へ、百王改まず、玄風長く被らしめて万古差(たが)ふことなし。所以に国を治め家を治るに、常然たり、楷式たり。釈教は義を棄て親を棄て、仁ならず孝ならず。闍王父を殺せる醜じて愆(とが)無しと説く、調達兄を射て無間に罪を得。此を以て凡を導く、更に悪を長すことを為す。斯を用て世に範とする、何ぞ能く善を生むや。此れ逆順の異十なり。

とある。すなわち、老子の教えは、孝と忠とを説くから、家を治め国を治めるみちにかなうことは明らかである。それに対して、釈迦の教えはこの老子とは逆に孝と忠とを否定する不仁不孝の教えである。そこでこういう孝と忠とを否定する釈迦の教えで一般の人を導くならば、いよいよ悪を助長することになる。それで、どうして善を生ずることができようか。これは、老子の教えが道に順い、釈迦の教えがこれに逆らうという第十の異であると。もちろん、これは外論の仏教批判である。

ところで、この文章の少し前に、次のような文が、同じ化巻に引かれている。

『菩薩戒経』に言く。「出家の人の法は、国王に向て礼拝せず、父母に向て礼拝せず、六親に務へず、鬼神を礼せず」と。

つまり、「菩薩戒経」によると、仏道においては、国王、父母、六親、鬼神の否定を本質とすることが説かれているのである。そうすると、さきに仏教が孝と忠とを否定するといった外論からの非難は、実は仏教の本質をついているわけである。

「教行信証」信巻には、仁義礼智信は世間の善法とされ、同化巻には、「老子周公孔子等、是れ如来の弟子として化を為すと雖も、既に邪なり、ただ是れ世間の善なり。……老子の邪風を捨てて、法の真教に流入せよとなり」とある。すなわち、老子周公孔子などの教えは、ただこれ世間の善にすぎず、したがってこうした世間の善を捨てて、仏法の真実の教えに入れ、というのである。

これによって、親鸞は仏教を世間一般で善法とされる、いわゆる世善の次元と厳密に区別し、むしろ世善の立場からは、そのことがどうしても、いよいよ悪を増長させるとしか考えられないことをもって仏教の真実の立場としていたことがわかる。それを世善の立場の基本をなす孝と忠との否定としてとらえている。

もっともこうした孝と忠との否定の思想は、単に親鸞一人にだけ見られるものではなく、同じく鎌倉新仏教を打ちだした道元、日蓮などにもみられるものであった。

「正法眼蔵随聞記」に、

出家は恩をすてて無為に入る（棄恩入無為）故に、出家の作法は、恩を報ずるに、一人にかぎらず、一切衆生をひとしく父母のごとく恩深しと思ふて、なす処の善根を、法界にめぐらす、別して今生一世の、父母にかぎらば、無為の道にそむかん、……忌日の追善、中陰の作善なんどは、皆在家に用ふる所ろなり、衲子は父母の恩の、深きことをば、実の如くしるべし、……戒経の父母兄弟死亡之日の文は、且（しばら）く在家に蒙むらしむるか、大宋叢林の衆僧、師匠の忌日には、其儀式あれども、父母の忌日は、是を修したりとも見へざるなり、

と、道元の言葉を伝えている。この道元の思想は、「歎異抄」の「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏まふしたることいまださふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり、…」と同様なものと思われる。

この道元の思想は、右の文によっても分かるように、「棄恩入無為」という仏典の言葉によっているが、この言葉は日蓮においては、孝の否定として受けとられていた。日蓮の「兄弟抄」に、

一切はをや(親)に随ふべきにてこそ候へども、仏になる道は随はぬが孝養の本にて候か。されば心地観経には孝養の本をとかせ給ふには、棄恩入無為真実報恩者等云云。

とあり、世間の道では親に従い、親に孝行するのが範とされているが、仏道では両親に従わぬのが実は真の孝行の根本とされているといっている。

こうして、親鸞、道元、日蓮において、両親(孝)の否定が説かれている。

また、国家否定の思想も、親鸞のみでなく、道元、日蓮にも見られる。

「正法眼蔵谿声山色」には、

国王大臣の帰依しきりなれば、わがみちの現成とおもへり、これは学道の一魔なり。あはれむこころをわするべからずといふとも、よろこぶことなかるべし。……前仏いはく、国王・王子・大臣・官長・婆羅門・居士に親近せざれ。まことに仏道を学習せん人、わすれざるべき行儀なり。

とあり、道元が国王および国王をめぐる国家権力に近づくことを厳にいましめている。国家の否定である。

日蓮も「報恩抄」に、

仏法を習ひ極めんとをもわば、いとまあらずば叶ふべからず。いとまあらんとをもわば、父母・師匠・国王等に随ては叶ふべからず。是非につけて出離の道をわきまへざらんほどは、父母・師匠等の心に随ふべから

ず。この義は諸人をもわく、顕にもはづれ冥にも叶ふまじとをもう。しかれども外典の孝経にも、父母・主君に随わずして忠臣・孝人なるやうもみえたり。内典の仏経に云く、棄恩入無為真実報恩者等云云。比干が王に随はずして賢人のな(名)をとり、悉達太子の浄飯大王に背きて三界第一の孝となりしこれなり。

と記している。このように、日蓮は比干や悉達太子＝釈迦が王に随わず、父に背いたこと、つまり日常的な立場からは不忠、不孝の行為が、実はかえって本当の忠であり、孝であったことを例示しながら、仏道に志すものは、父母・師匠・国王などに随ってはならないことをいっているのである。

ところで、このような言葉も単なる言葉として終っているのでなく、果たして実践されていたのであろうか。

親鸞においては、両親と国家とが実践的にも否定されていた。先ず両親(孝)の否定については、たとえば、「親鸞聖人御消息集」所収の七月九日付け、性信宛の手紙に次のような文が記されている。

……おほかたは、このうたへのやうは、御身ひとりのことにはあらずさわらふ。すべて浄土の念仏者のことなり。このやうは、故聖人の御とき、この身どものやうやうにまふされさふらひしことなり。こともあたらしきうたへにてもさふらはず、性信房ひとりの沙汰あるべきことにはあらず、念仏まふさんひとは、みなおなじこころに御沙汰あるべきことなり。御身をわらひまふすべきことにはあらずさふらふべし。念仏者のものにこころえぬは性信坊のとがにまふしなされんはきはまれるひがごとにさふらふべし。念仏まふさん人は性信坊のかたこと(方人)にこそなりあはせたまふべけれ。母・姉・妹なんどやうやうにまふさるることは、ふるごとにてさふらふ。……

この手紙は、親鸞が関東を去って京都に帰ってから二十年ほどたった建長年間に、東国の教団に加えられた念仏弾圧事件に対処して、親鸞の弟子・性信が鎌倉幕府に陳情し、事件が明かるい見通しになっている模様を

親鸞に知らせたのに対する親鸞の性信への返書である。これによって、性信が母・姉・妹らから非難されていたことが知られる。つまり、念仏弾圧事件に対し、性信がそうした念仏者になったことを母・姉・妹らが罵っていたわけである。このように親・兄・姉から罵られ、四囲の人たちや村から追放された性信に、そうした人たちの非難はもう古い道徳でしかない。毫も気にかける必要はない、と親鸞は性信を励ましていたのである。性信が親鸞の説く念仏に帰するためには、母・姉・妹らの反対や、いわゆる村八分を覚悟せねばならなかった。すなわち、これまで性信の家や村のなかをおさめてきた道を突き破り、否定することにおいてしか念仏者になる途はなかったわけである。それは、親の否定であり、孝体系の拒否である。このように、親鸞の思想は親、孝の否定を要求するものであった。

つぎに、国家(忠)の否定についてはどうか。これについては、「教行信証」の最後の部分で、承元元年における法然を中心とする吉水教団の弾圧について、

主上・臣下、法に背き義に違し、忿(いかり)を成し怨を結ぶ。茲に因て、真宗興隆の大祖源空法師、幷に門徒数輩、罪科を考へず猥りがわしく死罪に坐す。或は僧儀を改め、姓名を賜ふて遠流に処す、予は其の一なり…

と記している。昭和十六年に四版として発行された「真宗聖教全書」二宗祖部に収められている「教行信証」では、右に引用した文の最初の「主上」の二字が欠字となって空白にされている。昭和十六年といえば、いわゆる大東亜戦争で、「主上」が「法に背き義に違し」とあっては、不敬罪に問われる心配があるから、それをおそれて、編集者がこの「主上」の二字を削除したのであろう。

親鸞の当時においても、こうした朝廷、天皇への公然とした批判は見当たらないといってよい。そうしたなかで、親鸞が憚るところなく「主上」およびそれをとりまく「臣下」が、「法に背き義に違し」た行為を犯したと堂々と批判しているのである。このことは、親鸞が国王、国家を否定していたことを最もよく物語ってい

る。

また親鸞の手紙(「親鸞聖人御消息集」所収の九月二日付)には、関東における真宗教団が在地の領家、地頭、名主層と対立していたことを伝えている。当時の在地における支配層はこの領家、地頭、名主層であったわけで、ここにもたらした国王・国家の体系につながる支配層＝主人の否定において、真宗が成立していたことを鮮かに示している。

こうして、親鸞においては、孝と忠、親と国王・主人、家と国家、つまり両親と国家との否定が、世俗生活における基本となっていたといえよう。

それでは、このような両親と国家との否定は、どのような意味を実際にもっているのであろうか。つぎにそれについて考えてみたい。

三、両親、国家の否定とその意義

マックス・ウェーバーによれば、家は権威の根源的な基礎とされている。とくに農耕は土地と切り離すことはできないから、定住を強いるようになる。そこでは土地は先祖伝来の性格をもつので、家は先祖と一体となり、先祖伝来の家の秩序に服することが、家の幸福、繁栄をもたらすものとして要求される。先祖伝来の仕きたり、昔からあったもの、そうした伝統が侵すべからざるものとして神聖視され、家族道徳の決定的な契機となる。したがって、家の否定は、伝統的支配の否定となる。ところで、伝統的支配、権威服従的態度を次代をになう子たちに教育するのは、先ずほかならぬ両親であろう。つまり、両親によって子たちは先ず伝統、権威への服従を教育されるわけである。したがって、親・家は肯定的存在といえよう。国主・主長、国家・政治も

こうした肯定的存在である。ここからは現体制を突き破り、変革するといった否定的エネルギーは出てこない。この意味で、カントが教育論で、教育の最大の敵は、両親と国家であるとしたこともわかるようである。

いわゆる宗教改革をなしたルターが「小信仰問答書」の十誡中第四誡で、「汝は汝の父と汝の母とを敬うべし」の答として、「われわれの両親と主人とを軽んじて怒らしめることなく、かえってこれを尊敬し、これに仕事し聴従し、愛し貴まなければならない」としている。この「主人」とは、地主、親方、領主、工場主、部隊長、領邦君主、皇帝など一切の「眼上の者」Herr に関した。そして、ルター派の家庭の子供は「家長」の前で毎日、このカテキズムを復誦しながら成長したという。したがってルターのこうした考えは、此世の主人権力者に対する心からの柔順と服従を歓迎し、これへの不柔順、不服従を憎悪した。それはルターの伝統主義および家長制との妥協であった。そこでこのようなルター派の雰囲気は、あのドイツの保守主義、軍国主義に恰好の精神史的基盤を提供したといわれる（青山秀夫「マックス・ウェーバー」一七六―一七七ページ）。

ここで、今日の本願寺教団を築いたといわれる蓮如の孝行奨励が思い出される。蓮如は、「何よりも、親に不孝なる人、蓮如上人第一きらひにて候」と、門徒に対し、親不孝を一番嫌いだといっていたという。ところで、この蓮如の親孝行の奨励は、蓮如の末年に当たる明応三、四年（蓮如の八〇、八一歳）頃から言われだしたこととといわれる（笠原一男「中世における真宗教団の形成」二〇三―二〇四ページ）。つまり、蓮如は本願寺教団の膨大な増加に伴い、こうして、せっかく築きあげた教団の勢力が支配層との摩擦抗争によって失われるのを恐れ支配者への柔順をねらって、先ず両親への柔順、服従を強いる孝行を強調したのであろう。両親への柔順は、主長、支配層への柔順、服従につながるからである。蓮如はこの晩年の段階ではもう守勢の位置にとどまっているのである。本願寺教団の停滞はこうした親鸞の教えに背いた親への孝行を誓わせたときからはじまったといっていいであろう。それは主長、支配層との妥協であり、伝統、権威への盲従であり、保守主義、肯定主義

への迎合にほかならない。

親鸞が「教行信証」化巻で、念仏者の決して仕えてはならないものとして、諸天神、余道、天、鬼神、吉良日卜占祭祀、神、邪神外道、余乗、余天、神明、国王・父母・六親・鬼神、仙道、老子・周公・孔子、鬼、諸外天神、諸外道（公卿百官候王宗室、諸寺釈門、洛都儒林）などをあげている。このうち特に、神明と老周孔に仕えてはならぬことを繰り返し述べている。たとえば、福を求めて神明に承事するものは、「災障禍、横さまにうたた弥々多し、連年に病の床枕に臥す、聾ひ盲ひ、脚折れ、手攣きおる」という善導の「法事讃」の文を引いている。すなわち福楽を求めて神に仕えるものは、災障禍がいよいよ増し、毎年病床に臥し、耳はつんぼになり、目はめくらになり、足は折れ、手は折れる、といった報いを受けるというのである。こんな残酷な報いがあろうか。死よりもつらい生き地獄の報いである。これをみても、親鸞がいかに神明への奉仕をきびしくしりぞけていたかが知られる。

親鸞の当時できた「古今著聞集」は、「神祇」からはじまり、「沙石集」も「大神宮の御事」を最初に掲げている。また新しい時代の担い手として登場した武士によってつくられた「御成敗式目」も、先ず「可修理神社専祭祀事」をもって開巻の劈頭においている。こうした神明への承事が当時の秩序道徳を支える根本とされていたわけである。こうしたなかにあって、そうした神明承事に残酷きわまりない報いをもってこたえ、それとの絶縁を力説している親鸞は、まことに驚異に値するといわなければならない。親鸞が前述したように、神と老周公への親近を特に力点を置いて拒んでいるのは、この二つの教えが当時の体制を支えていた大きな二本の柱となっていたためであったからであろう。言いかえれば、現体制を打ち倒し、新しい世界を待望するために、そうした現体制の支柱となっていた右の二本の教えを否定する必要があったわけであろう。

イエスは、自分は地上に平和をもたらすために、ここに来たのではなく、むしろ地上に分裂をもたらすため

に、来たのだ、と言ったという。親鸞も現状維持的平和のために教えを説いたのではなく、そうした現状肯定に対し、亀裂を与えるために、念仏を説いたといえよう。

こうして、肯定主義、保守主義の根源的基礎とされる両親、国家の否定を親鸞が取り上げたことは、きわめて意味のあることと解される。

今日、真宗が浸透している地域では、民間伝承の史料採訪は困難といわれている。つまり、真宗信仰が民族宗教的、呪術的、民間信仰的、そうした現状べったりの——否定的契機のない——肯定的伝習にたずさわることを拒否しているので、そうした史料が生き残っていないのである（たとえば、堀一郎「宗教・習俗の生活規制」所収の福島県相馬藩の真宗移民調査研究論文）「門徒物知らず」という言葉もあり、今日でも門松やシメ縄、伊勢の大麻などを用いない門徒も見られる。この事実はきわめて注目に値するもので、真宗の誇りである。これも祖師親鸞の上述のごとき精神に淵源しているのであろう。

未開社会においては、罪という語と原因という言葉とが混乱しているといわれる。そこでは自分が原因となるような独自な自由な行動は、共同体の枠からはみ出し、その秩序を乱すものであったから、共同体を裏切るものとされ、有罪とされたわけであろう。こうした未開社会の考え方からすれば、両親、国家への孝と忠とを否定し、世に背いた一生を歩みつづけた親鸞は、生涯を罪人として終始したことになる。それは、また先天的・既定的に通用している権威、丸山真男の言葉を借りれば「である」社会、「である」道徳、そうした「である」こと（「日本の思想」一五四ページ以下）のうち崩しともいえよう。しかるに、戦前、進歩主義者が反進歩主義者として挙げているリストに、寺院の僧侶が神官と警官と並べて記されていたという。僧侶が時の権威の傀儡になっていた証拠である。悲しむべきことである。あるキリスト者の集いで、つぎのような反省がなされた。それはクリスチャンは自分を守る姿勢に終始し、あたりさわりのない、人受けのよい、強い発言をしない、実

直で嘘をいわない、そうした青年を一番理想像として教育されてきた。なるほど、このようなクリスチャンはまじめで、おとなしいから、倉庫番や守衛にはいいが、骨のある仕事には向かない、これではいけない、というのである。両親、国家「である」ことに忠誠なだけでは、倉庫番や守衛には適しているが、骨のある仕事には向かないのである。真宗者は倉庫番や守衛だけで満足していてよいのだろうか。ただ自分を守る姿勢に終始し、あたりさわりのない、人受けのよい、進んで強い発言をしない、そうした、私を持たない、いわば飼い馴らされた人だけで事足れり、としていてよいのだろうか。

新興宗教の殆んどは、祖先供養に最も力を注いでいるといってよい。ところで、三十四年に吟味調査された統計数理研究所の「日本人の国民性」(一八〇ページ以下)によると、宗教を信じていると答えたものが、全体の三五%であり、「あなたにとってなにがいちばんたいせつか」との質問に対し、宗教とか神仏とかいうものはごくわずかしかなく、祖先を尊ぶというものが全体の七七%あり、しかも家で一番大切なものとしてあげられたなかに、位牌、仏壇などが一五%を占めている。これで、祖先崇拝、祖先供養ということがいかに日本人の宗教的な心の根深いものであるかがわかる。こうして新興宗教が祖先供養を看板にすることによって、民衆の心をつかんだわけであろう。新興宗教の生活規律をみても、この祖先供養とならんで、両親への柔順、自我の否定が強く誓わせられている。たとえば、立正佼成会、仏所護念会教団、妙智会教団、妙道会教団など日蓮系新興教団の母胎であった霊友会教団では、「正行」六項目の第一に、先祖供養を掲げ、子供たちの「こころえ」七つの第一に「御先祖様に朝夕のごあいさつをいたしましょう」、第二に「お父さんお母さんのいいつけを良く守りましょう」と、祖先供養と両親への柔順を誓わせている。念法真教では「五聖訓」の第一に、神仏祖先の尊敬と家内の和合円満をあげている。生長の家では、「信徒行持要目」八つのうち、第一に「天地一切のものに感謝すべし」、第六に「常に自我を死に切るべし」とし、PL教団では、「信仰生活心得」二十一か条中

第二に「人や物事や天候の不足等思わず、自分の考えや仕方の足りないところを発見し、……」、第三に「人や物事に感謝の心…」、第六に「自分の考えにとらわれて強情ばりません」、第一五に「何事にも度を過さぬように…」とあり、また同教団「処世訓」二十一か条中第六に「自我無きところに汝がある」とし、他との摩擦抵抗をできるだけ少なくしようとしていることがうかがわれる。

このような新興宗教の生活規律と世間の大きな関心を引いた二十六年の無着成恭の「山びこ学校」における六つの誓い（高木宏夫「日本の新興宗教」五一ページ所収）

○いつも力を合わせていこう
○かげでこそこそしないでいこう
○いいことを進んで実行しよう
○働くことが一番すきになろう
○何でも、なぜ？　と考える人になろう
○いつでも、もっといい方法がないかさがそう

とを比較してみると、そこに生活態度の志向において大きな開きのあることが知られよう。同じ新興宗教のなかでも創価学会は、祖先を大切にせよ、ということでは他と同様であるが、ここでは、そうした肯定主義と同時に現状打破のイデオロギーを掲げている。これが創価学会の中核をなす若い青年を引きつける原動力となっているといわれる。（村上重良「創価学会と公明党」四一ページ以下）。

こうして、真宗と土着化を考える場合、「である」ことに即物的に適応するのではなく、それとは正反対に「である」ことの根源的な基礎とされる両親、国家の否定をその基本とすべきことをみてきた。

いったい、仏教の出発点とされる「出家」ということも、家を出る、つまり、家を否定することを意味す

る。この家の否定とは、われわれがこれまでみてきたように、両親、主長、国王、国家の否定を意味していた。したがって、さきに親鸞が「教行信証」化巻に引用していた「菩薩戒経」の、出家の人の法は国王・父母・六親の否定、としたことは、仏教の基本的立場を正しく把握していたといえる。この両親、国家否定の立場は、最近のわが国における道徳教育、家、愛国心、期待される人間像、などの重視といった一連の動きに対しても、きわめて深い意味を示唆していると思われる。戦後に育った今日の高校生に、甚だ行動的積極的発言のみられることは注目に値する。せっかく育ってきたこの戦後の芽を、少年の非行化防止といった美名に扮飾して摘みとってはならない。

なお、真宗の土着化については、さらに「教行信証」における真と化との矛盾角逐を追究して考えなければならないと思われるが、それについては他日を期したい。その意味では本稿はそのはしがきにしかすぎないことを深くお詫びする。

（一九六五・四・二九）

東西の出会いのとき

キリスト教はその世界伝道において他の諸宗教と出会わざるを得ず、そのために諸宗教との出会いという問題が現在活発に論究されているが、その出会いにおいて力強く対処し、効果ある伝道がなされるためには、諸宗派の統一ある行動が必要となり、またキリスト教としての連帯性の自覚が要求されるわけであろう。同時にまた、出会いには相手をよく理解してかかることが必要であるとして、他宗教との「対話」が強調されている。そういう気運と運動のおこりつつあるのを見るとき、やがては押し寄せて来るであろう高潮の遠鳴りを聞くような感じを禁じえない。翻って、仏教界の現状を見れば、あらゆる方面で、あまりにも立ちおくれている。来るべき出会いを迎える用意も全くなく、出会いがやがて来ることの意識すらもないかのようである。

西谷啓治『親鸞の世界』より